

外来魚駆除モデル水域 - 曾根沼における外来魚の現状

山本充孝（滋賀県水産試験場）

はじめに

滋賀県では、琵琶湖におけるオオクチバス（以下、バス）、ブルーギル（以下、ギル）駆除のモデル水域として彦根市にある琵琶湖内湖の 1 つである曾根沼（面積 21.6 ha、平均水深 1.8 m）を選定してバス、ギルの駆除とそれに伴う魚類相の変化を小型定置網による魚類相調査等を継続的に行っている。

2003 年～2007 年

曾根沼における駆除の取組は 2003 年に開始され、当初は生息数が多いギルを中心に釣り、投網、改良かご網などを用いて駆除が行われた。その結果、標識放流による推定ではギルは当初の約 1/5 に減少した。一方、バスは駆除量も少なくあまり減少しなかった。

2008 年～2021 年

2008 年からは、バスを主な駆除対象として電気ショッカーボート（以下、EFB）とタモ網すくいによる仔稚魚の駆除（以下稚魚すくい）を行った。これらの駆除を 10 年以上継続した結果、一時は年間 100 kg 以上のバスが捕獲されたが、バスの捕獲量、CPUE（単位努力量当たりの捕獲量）はともに大幅に低下した。バスの減少に伴って、在来魚とエビ類の小型定置網での CPUE や確認された在来魚の種類数は増加傾向を示し、以降も高水準で推移している。特に、ホンモロコやモツゴなどのコイ科魚類の増加が顕著であり、捕獲数としてはスジエビが圧倒的に増加している。これらのことからバスの駆除によって生息量を減らすことができれば、コイ科魚類が回復することが確かめられた。

2022～2024 年

2022 年からは駆除努力量を大幅に減らして外来魚の動向を経過観察している。稚魚すくいによる駆除では 2021 年からは捕獲されておらず、実質的には EFB による捕獲を 1 日だけ行うだけの駆除努力量で、バスの増殖を抑えている状況となっている。さらに、それだけでなく今年度のバスの捕獲数は EFB による 1 個体のみであり、当歳魚や幼魚は全く確認されなかったことからこの少ない駆除努力量によってでも繁殖を抑制できている可能性もあり得る状況となっている。